

防災の日

9月1日は、防災の日、全国各地で防災訓練が実施されています。

防災の日は、1960年（昭和35年）に閣議了解により制定されたものですが、その理由は、台風の襲来が多いとされる二百十日に当たることと、今から88年前のこの日に関東大震災が発生したことによります。

1923年（大正12年）、関東地方に神奈川県相模湾を震源域とする大震災が発生しました。地震の規模はマグニチュード7.9という大きなもので、神奈川県を中心に千葉県・茨城県から静岡県東部までの内陸部や沿岸部に甚大な被害をもたらしました。

地震の発生時刻が昼食の時間帯と重なったことから、各所で火災が発生、その火は地震発生時の強風に煽られ、火災旋風を引き起こしながら広まり、鎮火したのは2日後といわれています。

死者・行方不明者は10万5千名余、その多くは火災による焼死者でした。中でも、「陸軍本所被服廠跡地」では3万8千人もの焼死者を出しています。

また、関東大震災では、流言飛語により、非常に多くの朝鮮人が民衆によって虐殺されたことも、記憶に留めておくべきです。

私は、1973年から2年ほど、総理府（現内閣府）の審議室というところで防災対策の仕事をしておりました。当時は、関東大震災発生から50年を経過したところであり、専門家からは南海、東南海地域には、何時関東大震災級の地震が発生してもおかしくないと指摘され、国会などでも災害対策について様々な議論がなされていました。

それから既に40年近く経過しており、南海・東南海地震が現実のものとなる危険性はますます高まっています。

今回の東日本大震災はマグニチュード9.0と、観測史上最大であり、津波の破壊力は想像を絶するものでした。

このため、東日本大震災が発生した当初、想定外という言葉がしばしば登場しました。しかし、過去の地震でも、数十メートルの高さの津波に襲われた記録が各地にあるのですから、想定外というのは、危機管理の任にある者の言い訳に過ぎないと思っています。

現に、東京電力では、「福島第一原発に10メートルを超える津波が押し寄せせる可能性がある」との試算結果を3年前にはまとめていたのです。東電も国も、しっかりとした対策を講じなかった責任は大きいといわざるを得ません。

去る7月になくなった小松左京氏は、代表作「日本沈没」の中で、地球物理学者にこういわせています。

「人類が、科学的に地震の研究観測を始めてから、まだ百年もたっておらん。地球全体を科学的に調査しはじめてから、これまた一世紀余り、本格的な、地球大規模の観測が行われはじめたのは、わずかに1950年代以降だ。(中略)われわれは、まだ、この地球について、爪先でひっかいたぐらいのことしか知らんのだよ。」

自然という大きな力に対して、我々はもっと謙虚に、しかし、知恵と力の限りを尽くして向き合っていくことが必要なのだと、今回の大震災は改めて教えてくれています。(塾頭 吉田 洋一)